

トレパンをはいた

パスカルたち

久田 恵

劇団青い鳥ものがたり

久田 恵

トレパンをはいた
スカルたち

劇団青い鳥ものがたり



著者略

久田 恵(ひさだ めぐみ)

一九四七年北海道生まれ。

上智大学文学部中退。

主にノンフィクションの分野で仕事をすする。

著書に

『母親が仕事をもつとき』(学陽書房)

『サーカス村裏通り』(JICC出版局)

『フィリッピナを愛した男たち』(文芸春秋社)

などがある。

トレパンをはいたパスカルたち
劇団青い鳥ものがたり

一九八九年十一月二〇日発行

著者 久田 恵

発行者 川内信夫

発行 透土社

東京都千代田区神田神保町二二二

電話・〇三二六一・三三三六七

発売 丸善株式会社

制作 明光グループ

(合名会社明光プロセス・株式会社サンビーム)

© 1989 Megumi HISADA

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、
法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となり
ますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
(検印廃止) 落丁・乱丁本お取替えいたします。



A highly decorative, symmetrical frame with intricate scrollwork and floral patterns. The frame is horizontally oriented and tapers at both ends. The word "CONTENTS" is written in a bold, serif, all-caps font across the center of the frame. The letters are white with black outlines, set against a dark background within the frame's inner border.

CONTENTS

i
青い鳥ってなに？

芝居づくりの秘密！鎌倉山 鎌倉山は蟬時雨の中にあつた

iii
芹川藍の章

- ❖ 自分の中にひつかかつてる何かを括弧にくくつたままでいたら、人生の方程式つて解けないんじゃないの
- ❖ 青い鳥つて、それぞれに触れ合う程度に肩を並べて同じ方向に歩いている人たちなんだよね


iv
葛西佐紀の章

- ❖ 青い鳥の仲間たちから差し伸べられた手を、私は自分よりも信用したんだと思う
- ❖ 誰でも、お前自身であることがとりえなんだよつて、自分で自分を抱きしめてやるほかない時つてある

芝居づくりの秘密？代々木八幡稽古場「ゆでたまご」といっぺんおいしい芝居はこうして作られた

v

- ❖ いまだかつて見たことのない装置つて？
- ❖ 初めての立ち稽古はいつも恥ずかしい
- ❖ 自分の言いたい台詞を言う幸福
- ❖ 喧嘩のシーンは本気で怒つてしまう



vi

上村 柚梨子の章

❖❖ 信頼がなければ相互演出はできない
❖❖ いい関係でなければいい芝居ができない

❖ 自分の中にあるものを大事にしたままで、
❖ 自分が居られる場所をずっと探して来たんだと思う
❖ ここに来ていいるお客さんは、私のお友だちです。
❖ そう思っって舞台に出て行くの



vii

天衣織女の章

❖ 私って自分の「素」のスタイルが、
❖ まだ決まっていけないような気がする……
❖ 舞台の上で本気になる、っていう方法しか、今の私にはないの



viii

伊沢磨紀の章

❖ 青い鳥を観た時、ずっと自分の憧れてきたものが
❖ 全部そこにあるって、思っってしまったんです
❖ 舞台の上で、ちっちゃい頃の
❖ あの時の青空をふと見た気がしたんです



ix

青い鳥ファミリーの人たち



x

青い鳥はどこからどこへ

—— 青い鳥の作品をたどる ——

❖❖ 姉と妹の捜し物の旅へ
❖❖ 私探しの旅は続く
❖❖ 我にかえらない主人公
❖❖ 新生青い鳥のまた再びの旅とは？

久田 恵

トレパンをはいた
パスカルたち

劇団青い鳥ものがたり



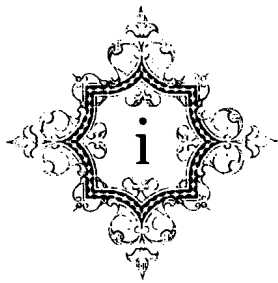
アートディレクション 長友啓典

デザイン 山口浩司

フォト 吉川秀子／青木司

カバーフォト 新山健次

協力 劇団青い鳥



青い鳥ってなに？



光に充ちた美しい場面だった。

そこは広い大学のキャンパスの一角で、物理学を学んでいるらしい四人の学生たち、青い鳥の役者である葛西佐紀、芹川藍、天衣織女、伊沢磨紀が楽し気に語り合っている。彼らは、人が生きていることの、そして暮らすことの悲しさをいまだ知らない初々しい元気な若者たちである。彼らは、学ぶことが楽しくてしかたがない。新しい知識に飢えている。なにかがわかるといふことが、喜び以外のなものでもない、そんなエネルギーに溢れている。

そこへひとりの教授がやってくる。彼女は上村柚子、ゆりあ先生である。成熟したおとなの雰囲気を感じさせる優しく知的な女性の役である。

「先生、私たちはなぜ、地球から落っこちないんですか」

土の中の水や養分をたっぷりと吸い、光に向かつてすくすくと育ってきた植物のようなすつきりと背の高いひとりの学生が質問をする。天衣織女である。

「それは、あなたがここに居たいからですよ」と、ゆりあ先生は微笑みながら答える。

それじゃあ答になっていない、先生にもそのことがわからないんだあ、そうに違いない、と学

生たちは無邪気な声をあげて笑う。ゴムマリのようにはずんでいるやんちゃな男の子のような芹川藍、がっちりとした身体つきではあるが、おっとりといつも遠くを見ているような葛西佐紀、ちいさな頭の中で哲学めいたものをひたむきに考えているような小柄な伊沢磨紀、そんな学生たちが、学んだばかりの難しい物理学用語を駆使して、美しいゆりあ先生を困らせようと次々と質問を浴びせかける。

ゆりあ先生は、尚なほも微笑み続けて言う。

「私はあなたたちよりも疑問がいっぱいある。だから先生なのです」

そして、静かに心をこめて、引力について語り始める。

引力は愛である、この宇宙は愛の物語でできているのだと……。

「この宇宙の始まりの時、そこには水素原子しかありませんでした。そして今、星があります。それは水素原子が引力という愛にひかれることで、その水素原子の内に潜む力を表に出したのです。それが星です」

じゃあ、人間はなにとひき合って人間になったのだろう……、学生の芹川がゆりあ先生の話にふっと心が魅かれたように疑問を口にする。ゆりあ先生が答える。

「あらゆる星の、月の、地球の引力にひかれることによって。そして空気、海の水、木の枝でさえ、えぞる鳥、夕焼け、あらゆるものにひかれています。今でも、その時と同じように、私たちはひかれ続けています」

そんなこと実感できない、と葛西佐紀が驚いたように言う。

「確かに実感するのは難しいことです。たとえば今、私たちの回りにテレビの映像がいくつも送られておるとします。サバンナを歩いているキリンや、地底湖に咲いているクレソンの花や、下町の和菓子職人の手さばきとか……、でも受信装置がなければ私たちには見えないのです」

なにかにひかれておる自分を感じるには、特別な受信装置を手に入れなければならぬということだろうか、芹川藍が考え込む。ゆりあ先生がヒントを与える。

「本当は、私たち自身が受信装置そのもの、なのかもしれませぬ。あなたが森を散歩した時には、あなたの体の細胞のひとつひとつは森の大气、木々とひき合っているのです。溶け合っていくのです。そして、明日の朝、あなたが暖かいお茶を飲む時、その森のすべてのモミの木が暖まるのです。そう実感している物理学者がいます。ブライアン・スウィム博士です。私にはまるで、初めて会った懐かしい友だちのように思えました。彼は言っています。そうやって、森もあなたも新

しくなっているのだと」

そんなふう感じられる自分になるためにはいったいどうしたらいいのだろう、本当にそんなふう感じられるのだろうか。天衣織女が相変わらずの屈託のない口調で質問する。

ゆりあ先生が答える。それは、本当のことに、長い時間をかけて耳を傾けることなのです、と。そして、その場を去って行く。

これは、劇団青い鳥が一九八八年十一月に東京・新宿紀伊國屋ホールで上演した第二五回公演、作・演出市堂令「美しき天然紀行・サイコロの責任」の舞台の一シーンである。

その日、四一八人定員のホールはいつものように満席だった。観客は二〇代の若い女性を中心だが、男性も四分の一ほど。三〇代、四〇代の女性もいる。青い鳥がブームになった八二年頃からのファンで、もう六、七年も見続けているという客が多いのも青い鳥の観客の特徴である。

ともあれ、役者五人、しかも制作スタッフ三名を加えても女性



美しき天然紀行——サイコロの責任

八人というこのちいさな劇団の一公演平均二週間ほどの観客動員数は約八〇〇〇人。根強いファン層に支えられている。

この青い鳥の芝居の魅力をひとことで説明するのは難しいが、ファンの人たちは、青い鳥の芝居を観ると、本当に元気になると言う。つらいことや嫌なことやまわりの人とどうにも折り合いのつかないことなど、いろんなことがあるけれど、やっぱり頑張っていこうと素直な気持ちになれると言う。

公演後に観客から寄せられた感想のアンケートも、そういう趣旨の声が圧倒的だ。

——なんだかわからないけれど、説明はできないけれど、とってもいいものを観たような気がします。ありがとうございます。また来ます。

これは、埼玉県からわざわざ観に来た高校生の女の子の声である。

——どうしてだかわからないけれど、アパートに今日帰ったら、すぐにおかあさんに手紙を書こうと思いました。元気になりました。良かったと思いました。

彼女は、東京で下宿生活をしている二五歳のOLらしい。

——なぜなのかわかりませんが、私は最初から最後まで、みんなが笑っているような場面でもずっと泣き続けていました。ずっと観ていたい、いつまでもこの空間の中に居続けていたいと思いました。

同じく二〇代の女性である。

ファンにとつて、青い鳥の芝居は、自分が元気になる、安らぐための「葉」のようなものらしい。確かに、彼女たちの芝居は、元氣を取り戻すためにはどんな心の回路を通つたらいいのか、というヒントに充ちている。そして、なにをヒントにするかは観る人によつて異なる。観る人のその時の心のありようによつてどのようにも見る事ができる、そういう柔らかな芝居なのである。

たとえば、一九八九年春に再演された二六回公演「青い実をたべた」の舞台では、幕開けに赤い衣装をつけた女性たちの鼓笛隊こてきたいが登場してきて、小太鼓を激しく打ち鳴らすシーンがある。たったそれだけのシーンに深く感動した、なにか世界に向かって彼女たちが毅然きぜんと対峙している、その誇りに充ちたまつすぐな表情に打たれた、身体の内側から勇氣が湧いてきた、と言う人がいる。

一九八七年の秋公演「ゆでたまご」の舞台での青い鳥の役者、葛西佐紀のあの台詞を私は一生忘れないと言う三〇代半ばの私の友人もいる。「いつまでも泣きやまない妹に言ったげるんだ。お前自身であること、それがお前のとりえだつて。ただそれだけど言つたげるんだ」まるでこの台詞つて佐紀さんが、私に向かって言ってくれたみたい、あの時の佐紀さんの表情、柔らかな言葉……、忘れない、と彼女は言うのである。

青い鳥の芝居を観た人は、みな、私だけの決して忘れないあのシーンというものを持っている。

そして、なぜか、その時の芝居の役名などは吹っ飛んでしまい、ほら、青い鳥の上村さんがあの時、ああ言ってたじゃない、とかペコさん（芹川藍の愛称）が「青い実をたべた」で、佐紀さんに、でえ丈夫、でえ丈夫、って言ったじゃない、あれを思い出すと本当に元気になっちゃう、大丈夫な気がしてしまふ、などとまるで舞台以外で会ったこともない役者のことを十年來の友だちのようにして語るのだ。

そして、私もまた思う。

冒頭に描いた「サイコロの責任」の芝居のあのシーン。ゆりあ先生を演じた上村柚梨子が心をこめて言ったあのことを忘れないようにしたいと。ゆりあ先生が教えてくれた世界を見つめるあのまなざしを回路にして、私は私があるのか、どう人と向き合うべきなのか、元気を失うたびに繰り返し考えてみようと思う。

あえて、「私たち」と言うとしたら、私たちは、舞台の上で女の人たちが主人公となっていくいきと私たち自身の言葉で語るのを聞いたことがなかった。私たちがこの時代の中で抱えている悩みや疑問を役者自身が問題にし、今あるところから自分を解き放って、安らかな地平に達したいと願う気持ちを率直に表現しているような芝居を観たことがなかった。

青い鳥の芝居に対するファンの深い共感はそのにある。

青い鳥が突然演劇界の注目を浴び始めた時、演劇評論家たちは、無垢な少女たちの世界をみず